

「十字架にかかれた神の子」

～主の十字架を味わう～

「イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、「まことに、この人は神の子であった」。」マルコ福音書15章39節

イエス様の十字架に向って立っていた百人隊長は、十字架にかかった者たちの死を確認するために立って見つめ続けていました。

何人も罪人たちの死を見てきましたが、イエス様の死に様は他の人とは比べ物にならないほどのものであったのでしょう。その告白を持ってマルコはイエス様が「神の子」であることを証しました。マルコ福音書1章1節には、「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」とこの福音書をスタートしています。どうして、「神の子」が十字架につけられなければならなかったのでしょうか？そこに福音の何たるかが示されているように思います。

また、「神の子」がつけられる十字架を背負った人物がいました。しかし、それは強制されたのできごとでした。誰一人、進んで十字架を背負おうとする人はいません。

また、群衆に押し切られて、イエス様を不当な裁判で十字架刑に処してしまったピラトの存在は腹立たしいものを感じます。お隣の韓国では群衆のデモに屈せざるを得ない、力のない大統領がいるが、昔も今も変わらないのだろうか？群衆の力の前に毅然と立ち続けることができる人間は誰一人いないのかもしれない。イエス様だけが、自分の進む道を真直ぐに歩んで行かれました。

何もわからずに聖書を読んでいるだけだったら、イエス様も人の子で、群衆の力に押し切れ、時の権力の前に打ちのめされて何もし得ずにただ無力なまま十字架にかけられた、としか見えないかもしれない。しかし信仰の目を持って聖書を読むなら、「十字架から降りてこい。そうしたら信じよう！」というあざけりに対して、そんなことは朝飯前なことであつたとしても、敢えてそれをせず、十字架でのお苦しみを受けられた主。それは、人類が受けるべき罪の罰を一身に受けた全能の救い主の力ある姿だつたことを知ることができます。

私たちには強制されて主の十字架を担がされるという恵みの世界があります。また、主をむち打ち、殴り、唾を吐き、十字架にはりつけにする私たちを赦し受け入れる愛の宣言を聞き、「まことにこのお方は神の子であつた」と宣言しなければならない使命があります。

私たちが罪の真ん中、弱さの真ん中にあるときに、主は私たちを愛するがゆえに十字架につき、赦しを宣言し、救いを成就してくださつたのです。

十字架という苦しく悲しい試練を経験し、その死を真正面から見つめることを通して、イエス様の救いと赦しの素晴らしさを見ることになるでしょう。神様はあなたをあまりにも愛しておられるので、最愛の息子の命をもくださったのです。その豊かな神様の愛をいただきましょう！